

第 6 章  
第 66 回  
日米学生会議概要

## 第66回日米学生会議概要

「文化の交差から創る道～学生が受け継ぐ80年の平和への歩み～」

-Communicate and Connect: Pursuing Peace at the Crossroads of Culture-

日米学生会議は、新たな発見に満ちた一夏である。

そこでは官僚のように、精緻なデータ分析や実現可能な政策提言をすることは難しい。メーカーのように、目に見える形で製品を提供するわけでもない。社会に出て仕事をすることがない学生が、国際問題を議論の様子を見て、人々は冷めた声で言うかもしれない。学生ができることなどたかが知れている、と。

80年前の学生も同じことを言われた。満州事変以降急速に悪化していく日米関係の渦中であって、何の後ろ盾もお墨付きもなく、ただ平和を希求する4名の日本人学生が太平洋を渡り、アメリカ人学生や教授を説得する――。誰の目にも無謀な挑戦に映ったに違いない。しかし彼らの熱意と勇気ある訴えは、国籍も政情も関係なく、やがてアメリカ人の心に届いた。そして遂に、第1回日米学生会議は開かれた。今日まで続く伝統ある学生交流プログラムの船出である。彼らは学生だからこそバイタリティに溢れ、自らも世界平和の一翼を担うべきであるという強烈な当事者意識を抱いていた。

今日、世界地図を広げれば、そこには幾多の問題が浮かび上がってくる。北朝鮮がミサイル打ち上げを繰り返し、中国が経済を急成長させ、軍備を拡大させる一方、アメリカは世界の警察としての存在感を薄めつつあり、日本を取り巻く安全保障環境は刻々と変化している。異常気象が続く中、

先進国と途上国との間では、温室効果ガス排出量削減をめぐる思惑が交錯する。歴史は過去の出来事であるが、それをどのように評価するかは、しばしば国家間の政治的争点となり、原爆投下、靖国参拝、従軍慰安婦をめぐる議論は、そうした歴史認識問題の最たる例である。2011年の大震災による福島原子力発電所の事故では、科学の絶対神話が崩れ、その限界と危険性が浮き彫りになった。移民や外国人労働者の受け入れは、労働力需給ギャップを徐々に解消していく一方で、治安の悪化や地域社会との軋轢を招くと懸念されている。世界の人々を魅了した宮崎駿作品に日本人の自然観や宗教観が通底しているように、絵画や音楽、建築などの芸術には、表現者の思想や感性など、その背後にある文化的アイデンティティが投影されている。2001年の同時多発テロの映像に映し出されたあの飛行機とビルは、衝突しあう正義の象徴であった。私たちは現代社会のこうした課題に自らその当事者として向き合い、自分が取るべき行動を考え、実行していく必要がある。それこそが80年前の学生が志したことであり、今日にも通ずる日米学生会議に課せられた使命ではないか。

「文化の交差から創る道」。参加する学生たちの人格、思考、習慣といった文化が、日米学生会議という場で交差する。そこでは絶え間なく議論をする中で、絶え間なく衝突と理解を繰り返す。「学生が受け継ぐ80年の平和への歩み」。積み重なる衝突と

理解の先に創られていく道は、平和への道である。たしかに今回の会議に参加するだけでは日米を、太平洋を、世界を変えることはできないかもしれない。しかし、人ひとりの人生をも変えてしまうような経験に恵まれる参加者がそれぞれの道を歩み続け、やがて日本と世界の発展に寄与してくことで、究極的には世界平和の構築に貢献する。私たちは、それこそが日米学生会議の本質であると考えている。参加者は日米学生会議の主役であり、世界中で起こる様々な問題の当事者でもある。そのめまぐるしい一夏は、自分の中に、世界の中に、きっと新たな発見をもたらすであろう。

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第 66 回日米学生会議実行委員会

【会議開催期間】

2014 年 8 月 2 日～2013 年 8 月 24 日

【事業実施期間】

2014 年 4 月 1 日～2014 年 3 月 31 日

【開催地】

デモイン、サンフランシスコ、ニューヨーク、ワシントン DC (順序未定)

本会議におけるプログラム

《分科会 (略称 RT) 》

本会議において活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米双方 5 名ずつの学生 (実行委員 1 名を含む) が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、

議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第 66 回会議における分科会は以下の通りである。

(1) Art and Identity

芸術とアイデンティティ

(2) Environmental Initiatives for a Sustainable Future

環境問題における国家、企業、市民の役割

(3) Immigration in the Modern Era

移民の功罪と展望

(4) Modern Consequences of Historical Education

現代における歴史教育とその社会的影響

(5) Morality and Justice

正義と道徳

(6) Smart Power in US-Japan Relations

日米関係におけるスマートパワー

(7) Technological Advancement and Society

技術進歩と社会

《 Field Trip 》

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO 及び研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な具体的視点を獲得するための重要な活動となる。

《 Special Topics 》

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な

議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

#### 《Conference Wide Reflection》

参加者が一同に集い、1ヵ月の共同生活や、会議中に感じるであろう、議論の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

#### 《Final Forum》

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、1ヵ月の総まとめを行う。主として分科会における議論の概容を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を第65回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。

